

ISSN0914-7748



1 APR. 2002

No. 23

ALHΘEIA

豊橋技術科学大学附属図書館報

ケニアの公立図書館／サイトウ アリソン.....	1
図書館の役割／金恩美.....	2
母国の図書館／トオン リン.....	2
フィリピンの図書館の歴史／Eva A. Barcelon.....	3
Peruvian Libraries / Juan Urbano.....	4
わたしの国の図書館／アマル バンドゥラ カーリヤワサン.....	5
Library of a university in Pakistan / Baluch Nasir Hayat.....	6
南アフリカにおける図書館／Pieter C. le Roux.....	7
A VISION OF UNIVERSITY'S LIBRARY IN INDONESIA / Isnen Fitri.....	7
総合目録データベース実務研修 (目録担当者コース) 参加記／黒柳裕子.....	9
第 14 回国立大学図書館協議会シンポジウムに参加して / 中野洋子.....	10
Information.....	11
OPAC検索と目録情報の見方／美野部亜紀.....	12
文献情報ガイダンスのお知らせ.....	13
TUT-L NEWS.....	14

特集 わたしの国の図書館 — 留学生からの寄稿 —

ケニアの公立図書館

サイトウ アリソン (ケニア)

ケニアでは、公立図書館システムが様々なサービスを行っている。ケニアは部族の伝統が染み着いている国家であり、国民の非識字率は男性と女性においてそれぞれ 14.4% と 30.9% (1995) である。これは公立図書館にとって極めて大きな問題である。一方、ケニアの経済的問題から、公立図書館システムは人々のニーズに応えるための運営基金を必要とするが、その基金を集めるのに大変苦勞している。

ケニアの公立図書館の大半は Kenya National Library Service (KNLS) 支所によって形成されている。その他は市と地方の図書館である。KNLS は 1965 年に法令により設立され、現在合計 70 万冊以上の蔵書と 23 箇所の図書館支所から構成されている。一般図書 2 冊を 2 週間貸し出したり、レファレンスサービスの提供を行ったりすると共に、学校への無料顧問サービス、盲人対象サービス、エイズ情報コーナーや全国図書館の週間展示会などを行っている。また、田舎や遠く離れた地域では、車両モバイル図書館

人の子供たちが本の配送サービスを当てにしている：つまりラクダ。ラクダモバイル図書館サービスは車で行きにくい地域に図書館サービスを行うため 1996 年に始められた。ラクダはナイロビから 400 キロ離れたガリッサ市の近辺にある 5 箇所の小学校を巡回し、本の配布を行う。同様のプログラムは北ケニアにあるワジル市でも設立された。このガリッサやワジル市は最も不便な地域にあり、住民の大部分がソマリ部族の遊牧民である。各ユニットは、3 頭のラクダが 500 冊の英語とスワヒリ語の漫画、子供の本やテキストに加えて、一時的に図書館を作るためのテントや床のマットを運ぶ。

しかし、こうしたラクダの巡回は安全性に問題があつて制約され、しかも主に寄付に頼らなければならない。また、子供用の本も少なく、適切なわずかな図書も長い間の使用で破損し、修理が必要である。モバイルユニットがなく、使用できるわずかな図書も古いという苦情もある。他方で、KNLS が地方の学習団体と協力す

図書館の役割

金 恩 美 (韓国)

私が韓国で通っていた大学の図書館と今在学中の豊橋技術科学大学の図書館を比べて見ると一番違うのはこの図書館には閲覧席があまり多くないことである。私は図書館と言えば最初に思い出すのがテスト期間中に学生たちで満員の自由閲覧席である。私もテスト期間中に良い席(人があまり行き来しない裏の席)に座るために朝早く起きて学校へ行くことが多かった。このように、大学図書館や公立図書館など韓国の図書館が受験生のための場所であることとは対照的に、本校の図書館は自由閲覧席というのは資料室の側においてあるテーブル数個が全部だった。

私たち韓国人大学生にとって図書館とは資料室より自由閲覧室の方がより深く認識されているのを見ると、時代が変化しつつある今、図書館も自由閲覧室ではなく情報提供と生活の場として位置づける新しい概念への転換が必要だと思う。さらに、韓国の大学の図書館では特に学生証の提示を要求しないので誰でも図書館への出入りと閲覧ができる。出口に

はマグネチック検索台があるため盗難の恐れもない。すなわち、誰でも自由に利用できる、利用者に親しい図書館なのだ。

図書館は色々な本を集めておくのが最も基本的なことであり、一層進んで人々に本を読ませる必要もある。情報の形態がたった活字のみだった昔とは異なって、様々な形で情報が波のように押し寄せてくる今日は、誰でも効率的に情報の利用ができるように図書館は情報提供者にもならなければならない。その上、教育機関に様々な教育情報と教育方法を提供する役割もしなければならない。

インターネットやネットワークなどを通じて無限の情報に接することにより、資料所蔵の有無や図書館の規模などは図書館を判断する基準にならない。利用者の欲しい情報をどんな形で利用できるようにしてあげるのが図書館の役割であると思う。そのために図書館は利用者中心の資料配置と積極的な利用者サービス次元での変化を試みる必要があるだろう。(特別研究学生)

母国の図書館

トオン リン (ミャンマー)

1999年4月に本学に入学して最初に本学の図書館へ行って見たとき、母国で活用した大学の図書館とはあまり変わらないだろう。本学の図書館は向こうよりインターネットに接続できるパソコンを自由に使えることと新しい本があることしかないだろうと思っていました。しかし、学期が始まって図書館ガイダンスを受けた後図書館の利用方法になれてきたときには自分の予想に反して全く相違する点が次々と出てきました。母国で数年間活用した図書館は本図書館に比べ色々な点でかなり遅れていたのが残念に思いました。

母国にオンラインサービスなどが当然までできてなかったが、一番相違点があるのは資料の探し方、学外資料の取り寄せである。私が修士課程を終了したヤンゴン大学構内にヤンゴン大学図書館と全国大学図書館をまとめる役割をする中央図書館という母国に一番古くて大きな二つの図書館があり、それ以外にも各学部特別な図書館があります。大学内にネットワークが繋がっていますが図書や資料などが本図書館みたいにパソコンで探せることがまだでき

ていません。見たい本やレファレンスなどを探したいときは各図書館に行ってみる(Catalog)から探して見つけたら図書館スタッフに申し込んで探している図書などをもらえます。図書館には欲しい図書などを簡単に見つけるため図書などを書名一覧表(Title-Catalog)、作者一覧表(Author-Catalog)、専門一覧表(Subject-Catalog)で探せるようになっています。また、もっと図書やレファレンスなどを早く見つけるため各学部の特別な図書館に専門書や論文などだけ配置されています。この特別な図書館の特徴は自分の専門書だけ集めているので一番早く見つけられます。また、この図書館に外国で留学した先生方が留学したときに利用した資料及び自分で買って利用した図書なども置いてありますので他図書館より自分の研究に関するレファレンスなどを簡単にしてもらえます。しかし、本学の図書館のパソコンでいろいろ条件から探せる資料の探し方よりはまだ不便でしょう。

もう一つの大きな相違点は学外資料の取り寄せです。本学の図書館では本学にない資料を他図書館が

ら資料のコピーを取り寄せたり図書館を借りたりすることができますが、母国の図書館ではこのようなサービスは残念なことにありませんでした。図書館に必要な資料がなかったら他の図書館に自分で探しに行かなければなりません。母国の図書館もこのサービスができるように見直してくれば幸せになるでしょう。少なくとも国内の図書館、できれば外国の図書館と協力して資料などを取り寄せるようにしてくれば勉強や研究などにもっと便利で役立つことになると思います。

本学の図書館と母国の図書館と比べてみて本学の図書館のサービスの豊かさを感じました。そのような本学に留学できて本当によかったと思います。本図書館の幸せなサービスをどんどん活用したいと思います。

さらに、母国に帰国後も相互協力等が発展し、本大学の資料が利用できるような時代になれば良いと希望しています。

(環境・生命工学専攻 博士2年)

フィリピンの図書館の歴史

Eva A. Barcelon (フィリピン)

フィリピンの図書館はスペインから伝わってきたキリスト教から大きな影響を受けた。

1565年～1780年にかけて、ヨーロッパから輸入されてきた本はほとんど宗教に関する本だった。この時、フィリピンの図書館は少なく、全ては修道院のものだった。図書館を管理する人は宣教師だった。図書館にある宗教の本以外は地図帳や学問的な写本であった。さらに、宣教師が中国の商人と図書交換を行っていたため、中国の文化に関する本も多少あった。18世紀の後半には本に対する要求が急激に増え、このため、フィリピンの図書館システムが向上した。この時代はヨーロッパから宗教の本だけでなく、科学などの学問的な本も増えてきた。しかし、本の種類が増えたと言ってもこの時代では、読書が社会の上位に限られたため図書館を利用する人は少なかった。

公立図書館という概念は1871年から出てきた。このとき、図書館を設立するため、優れた教師に賞品として本が与えられた。公立図書館にある本は主に学問的であり、世界の最新情報が得られるものだった。さらに、図書館を管理する人は宣教師から教師に代わった。1887年に設立された Museo-Biblioteca de Filipinas は、機構や規則などが革命的であり、現在フィリピンで最も大きな図書館であるフィリピン国立図書館の祖先と言われている。

スペインの占領を終えて、1898年にアメリカ占領がはじまった。アメリカの開拓者は近代的な図書館標準を紹介した。このとき、フィリピンの大学では、図書館課程が導入された。課程を導入した目的は、図書館に精通したスタッフを育成するためだった。1923年にフィリピン図書館協会が設立され、図書館員の協定などが作られた。この時代は図書館の文庫が増え、図書館が一般の人々にも利用できるようになった。

そして、第2次世界大戦が起きた。全国図書館の文庫は90%以上を第2次世界大戦でなくした。さらに、国の回復対策では図書館の優先順位がもっとも低かったため、全国の図書館を回復するのに20年間もかかった。1950年～1970年にかけて、フィリピンは図書館課程を少しずつ向上させ、図書館員になるため修士で学ぶ人も、海外に留学する人も増えた。20年間で少しずつ図書館のスタッフが教師や学生から図書館専門の人に代わっていった。

現在フィリピン国立図書館はフィリピンの技術を反映している。ほとんどのシステムがコンピュータを利用し、古い本や新聞などをデジタル化して保存している。しかし、フィリピンは日本に比べてまだ若い国であり、向上するまでには時間がかかるだろう。

(情報工学専攻 修士2年)

Peruvian Libraries

Juan Urbano (ペルー)

As books and magazines are a little bit expensive, libraries play a very important role in Peruvian students' education. For this reason almost all schools (Primary and High Schools), Universities, and some business enterprises have even small libraries where interested people can find the information they are looking for

I like reading very much so since being a child I have always gone to libraries. First, only for reading comics and adventure books and then, while being a student (from Primary to University) for getting materials for my homework and self-study.

In 1999, after finishing my Graduate Studies (in Industrial Engineering) in my country, I came to Japan for studying at Toyohashi University of Technology at the Department of Production Systems Engineering, in the Program of Systems Control.

Here I had the chance to know Toyohashi University Library and to compare it with the libraries we have in Peru. In my personal opinion, this library has some characteristics that make it quite singular and, in same way, different to other libraries I have visited before. The main differences I can mention are:

1. The schedule: Most of Peruvian Libraries work only from Monday to Friday and from 9:00 am to 8:00 pm. Some of them work on Saturday morning too, but not so many. And there are some of them that work only in the morning or only in the afternoon, so for people that is not free during the time they are working it is practically impossible to use them for getting the information they need.
2. Bookshelves access: As among serious readers there are some people that do not know how to

use books, or like to damage them, in most of Peruvian libraries it is not possible to have access to bookshelves, so you cannot leaf through books. You must fill an application form, according to information you find in a file (lamentably this information is not very complete), and give it to the librarian. Then, he/she will bring the book you asked for. If you are lucky, this book will really be the one you are looking for. If not, you must ask, following the same procedure, for another book. Maybe you can do it three or four times before the librarian get tired and refuse to attend you. Then, you must retire from the library without any book or with a book you really do not need.

3. Books lending: Books' borrowing is not like here. In Peru, the most common number of books you can borrow is three (some libraries afford only one) and for no more than one week. When there is a book (s) that many people want to use, the lending time can be reduced, sometimes, even to only one day.
4. Penalties: In Peruvian libraries there are too books that can be read only inside the library and others that can be took home. However, some times, desperate people bring home books that are not allowed to go outside library. When this happens, you cannot use your card one day for each hour you take the book outside. When you delay in returning a book you have borrowed, you cannot use your card two days for each delaying day.

In brief, I think that this Toyohashi University Library is very convenient specially because it is possible to use it almost any time you want, and for the many interesting books it has (even when it would be better if there were more books written in English or in Spanish).

(電子・情報工学専攻 博士1年)

私の国の図書館

アマル パンドウラ カーリヤワサン (スリランカ)

私は八歳のときから、毎日曜日に村のお寺で開かれていた仏教の学校に通っていました。私が小さかったので、一人でお寺まで行かせるのを不安に思った親に言われて、親戚のお兄さんと一緒に行っていました。学校から家へ帰る途中に、村の図書館に行くのがそのお兄さんの習慣でしたので、私もいっしょに利用していました。彼が本を選んで借りるまで、棚に並んでいる本をただめくっているのが楽しみでした。そのうちに私は、子供用の絵本の棚を見つけ、そこにある本を見始めました。しかし借りてまで読もうとは思いませんでした。それには理由があり、母に毎朝、子供用の英語の絵本を無理やり読まされていたからでした。また時間が経つにつれ、お兄さんが本を借りる間の私の行動が変わっていきました。新聞のテレビ番組の時刻表で自分の好きな番組の時刻を確認したり、新聞にあるコミックの絵を楽しんだり、動物の絵などが載っている百科事典をみたりすることでした。十一歳ごろ、ようやく図書館から本を借りたくなくてきて、その手続きをしました。その手続きには図書館を利用している大人が保証人になる必要があり、更に、村の役人さんの証明が必要だったので面倒くさいと思いました。

図書館から本を借りるようになって、図書館の利用回数が増えてきました。村の図書館には小説、歴史および宗教に関する図書、専門書、百科辞典など英語とシンハラ語で書かれたものが多くありました。その中で私の借りる回数が多かったのは、絵本と小説でした。その図書館の返却期限は、借りた日から二週間以内でした。返却期限を越すと一日あたり25セント(約0.5円)の延滞料金を支払わなくてはならなかったもので、なるべく返却期限以内に返すことを心がけていました。また、図書館には蔵書検索端末がなく、カウンター近くの棚の引出しにある、本の分類カードがアルファベットの順に並んでおり、それを参考に本を探していました。その時は、それ以外の本の検索の仕方を見たことがなかったので、決してこの作業が面倒くさいとは思いませんでした。図書館には勉強のできる場が設けられていて、大学

入試などの試験が近くなると、たくさんの人々が使っていました。

村の図書館とは別に、中学校と高校の図書館も使っていました。その図書館の貸し出しや検索の仕方は、村の図書館とはほぼ同じでした。

私は、スリランカの大学の図書館には入ったことが無いのですが、友達の話によると、本の分類は一通り行われていて、それらは、分野ごとにおよび著者ごとにです。また、閲覧室がとても広いと聞きました。しかし、開館は夜8時までだそうです。

私が日本に来てから、最初に使ったのが、高専の図書館および市立図書館でした。それらの図書館に入るときに、自分のかばんを持ったまま入れることにびっくりしました。それはなぜかということ、母国の図書館では、本を無断で持ち出すことを防ぐシステムが無かったため、図書館に入るときに、自分の荷物を図書館の外に置かなければならなかったからです。

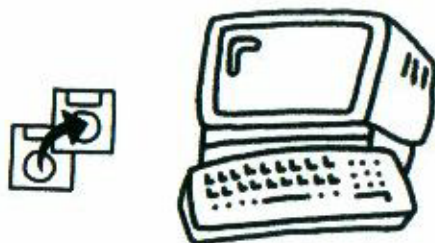
私から見た母国の図書館と日本の図書館の大きな違いは、本の管理のやり方と、図書館で利用できるサービスの種類でした。日本では、本の管理は、本をバーコードによって認識できるようになっていて、本を借りるときの手続きがあつという間に終わります。また、本を無断で持ち出せないようになっています。サービスにおいては、これらの図書館では、本だけではなく、インターネット、ビデオ、CD、DVDを利用できる設備が図書館に備えられています。

豊橋技術科学大学の図書館は、私が今まで日本で見ただの図書館よりも素晴らしくて、24時間自由に使えるといった特徴があります。

スリランカの図書館は技術的に遅れてはいますが、図書館の基本的な役割は果たしていると思います。

あと何年後にスリランカの図書館も日本と同じぐらいに技術的に進歩するかを夢んでいます。また、日本の図書館で新たなサービスを利用できることも期待しています。

(電気・電子工学専攻 修士2年)



Library of a university in Pakistan

Baluch Nasir Hayat (パキスタン)

Broadly speaking, there are two types of libraries in Pakistan i.e. public and institutional. Among institutional libraries are the libraries of governmental organizations, research organizations and academic institutes. Here, I shall briefly describe the working of library of university from where I graduated. Before moving onward, it would be a good idea to give a brief introduction of the university. The name of the university is University of Engineering and Technology (UET), Lahore. Like Toyohashi University of Technology (TUT), it also focuses on engineering and technology education, however, number of students are much larger than TUT i.e. around 10,000.

Let us come to library itself. It has a spacious three-story building and is located in the center of the university. On first floor, there is a seminar hall, magazine and newspapers section and language laboratory. This language laboratory is equipped with audio and video facilities and mainly used by international students for practicing and improving their English language skills. Rest of the library is divided into three sections namely circulation, reference and journals. The working of these sections is almost similar to TUT library. However, catalogue/reference of books are not computer based and a lot of time is wasted in locating a particular book. Though, computers are available but printing is not allowed for general use. Thus students can only type their reports and use Internet.

The working hours are usually office hours but during the examination library is opened till late night. However, it does not match with the 24

hours access as available in TUT library. This is one of the most unique feature of TUT library and as far as I know due to my stay at Mie University, this facility is not available in other Japanese universities either. However, one has to keep his card and remember I.D. number always to use this facility.

The UET library provides a service called as book bank. It sounds strange that there is a bank in library but it deals with books instead of money. Usually expensive textbooks which students can not afford to buy are available in book bank. Students can borrow textbooks for full term with a nominal payment. The book bank also provides stationary and other accessories at discount prices. Another event worth mentioning here is the annual book fair conducted by library. In this fair different publishers/booksellers display and sell the books at discount rates. It gives students an opportunity to see the latest books in their field of interest.

An important place in the library is carrel area. It is a separate room and is strictly "no speaking area". Students can concentrate on their work in a quiet environment without any disturbance of noise. During the examination period, this is the favorite place of students and students try to take seat by entering the library in the early morning. Although, no eating and drinking rule applies in the library, however, sometimes it is violated in the carrel area especially during the examination period. During the period when there are no examinations, some students use this area for taking rest due to its quiet atmosphere.

(機能材料工学専攻 博士3年)



南アフリカにおける図書館

Pieter C. le Roux (南アフリカ)

私は3年前に大学で勉強するために日本にきました。そして、図書館についてまず気づいた事は、その使われ方の違いでした。南アフリカの図書館は、読書、勉強、映画鑑賞、そして高等教育の授業の一端を担う特別な場所です。日本の図書館も同じ役割を果たし、多くの場合それらは、コンピューターなどの高い技術により、より良いサービスを提供してくれます。つまり日本と南アフリカの図書館の違いは、図書館の役割やサービスではなく、その使われ方についてなのです。

日本の図書館では、騒々しさの余り度々気分を害する事がありました。常に話をしている人たち、お菓子を食べている人、その上携帯電話で話しをしている人さえいました。そのような環境では何かに集中することはとても難しいです。南アフリカでは、図書館の使用について非常に厳密な規則があります。第一に、図書館内では大きな声で話しをすることは許されていません。もし誰かが大きな声で話し始めれば、他の誰かが即座に注意し静かにさせます。図書館で話をする時は、できるだけ小さな声でささやくように奨励されています。これは少し厳しく聞こえるかもしれませんが、全ての人に図書館をより良く使ってもらうために必要とされることなのです。多くの図書館には、何人かでミーティングを行える個室が用意されています。これらの特別な部屋は読

書や勉強をする場所から離されており、他の人たちの邪魔にならないようにしてあります。

現在日本では、ほとんど全ての人が携帯電話を使っていますが、図書館でも気にせず使用する人たちもいます。本を読んでいる人や集中して勉強している人たちは、携帯電話の着信音や携帯電話で話す人の声で気が散ってしまいます。南アフリカでは、図書館での携帯電話の使用は禁止されていて、図書館に入る際には携帯電話の電源を切るかマナー・モードに切り替えるよう図書館員から指示を受けます。この規則を守らない人がいれば、すぐに電話を止めるように注意されるか図書館の外で電話をするように指導されます。

しかしながら、日本の図書館は、ノート型パソコンの使用ができるなど、より良い環境を与えてくれています。コンピューターが使用できることにより、図書館でのレポート作成やインターネットを使うことが大変容易になります。南アフリカでは、常にこれらのサービスに必要な設備を備えている訳ではありません。しかし、私は早く日本の図書館と同じサービスと標準設備の提供ができるようになれば良いと思っています。

(環境・生命工学専攻 博士1年)

A VISION OF UNIVERSITY'S LIBRARY IN INDONESIA

Isnén Fitri (インドネシア)

INTRODUCTION

"Library is a 'store house' of a knowledge".

"Library is long life education"

"Library is a social phenomenon agency"

"Library is the heart of university."

Those words above, can be found at all articles about library in every newspapers or magazines.

The advance of technology innovate new global paradigm towards knowledge and information era.

Therefore, an old paradigm which described a library consist of building, collection (text book, non text book), librarian and management system oriented by the process of catalogue, numbering, supplying, etc, was not important anymore. Without doubted the new paradigm, library is the right or exactly and cheap place of knowledges resources for citizen, and will be completed with digital system.

In fact, almost people understand about 'meaning and function' of a library, as a source of documentation and education efforts, to enhance human resources. Even though most people does not know well how to create it, even how to maintain and upgrading systems and facilities. Also for the university, according to a word, 'library is the heart of university', it can facilitated and motivated the education process.

This kind of phenomenon shown at several university in Indonesia, especially state's one, reflected un integrated handling system and other related factors, such as 'cost', etc, compare to developed country, as Japan's condition. However, this report only a description of a university's library, based on observation and personal experience as a manager of architecture library in a state university, named North Sumatra University (USU).

Structural Organization

Almost the state universities in Indonesia have the centralization policy in concept that means formally, the university has one library, which is supported by the university management. As a result, this central library get full subsidy from the university. In the other hand, if the faculty of department has library, it means supporting by them. These library evolved cause of some lectures and students need the specific references, which are not provided in central library. However, some of them have problem in funding, therefore it can become an obstacle in the future. Even hardly ever they cannot operate anymore. In facts, they supported education system especially for department very much.

Collection and Circulation System.

Generally, every university's library in Indonesia operates everyday from Monday until Friday. The

range time operation is 8 hours, from 9.00 am until 5.00 pm. However, there are some departments libraries operate until 10 pm, especially for serving their postgraduate program. Besides, there are some libraries operate on Saturday until 13.00 o'clock. Actually, the libraries still maintain the old paradigm so that cannot be accessed from internet (the other places and whenever). There is no online networking between one library and the other, so we cannot access the collection of the other university's library in online system. There is good progression lately that almost the university's library in Indonesia have operated OPAC (Online System Access Catalog) with based on ISISDATA and applied DDC (Dewey Decimal Classification) for classifying the collection.

Directorate Higher of Education in Indonesia come out the amount of the collection standard, which is obtained for university's library. According to the standard that the library provides 15-20 item of books/student. Unfortunately, there is no data mention about the universities, which fulfilled the criteria. In general, the student can borrow the library's collection as mush as 2-5 books during one week. If the student return the books in out of time, they will get fine which the fine will be implemented for the books maintaining cost.

Facilities

Beside books and other collection, most big and old universities in Jawa, Bali, Sumatra, Celebes and Borneo islands, already had computer/internet facilities, although there is a fee, towards finance maintaining. There are some facilities, such as reading room which can be used until 20.00 p.m (in some big universities), completed with copy machine, and also a meeting room and lobby for some purposes, like book and collection exhibition, as seen in North Sumatra University's.

(建設工学専攻 修士1年)

総合目録データベース実務研修

(目録担当者コース)参加記

黒柳裕子

平成13年10月29日から11月9日までの2週間、国立情報学研究所主催の総合目録データベース実務研修(目録担当者コース)に参加する機会を得、日常業務をはなれて総合目録データベースに関する知見をより深めることができた。

この研修には全国の機関から12名の参加があった。研修の内容は総合目録データベースの開発の歴史や最新動向、多言語対応と文字コード、メタデータや目録規則の最新動向について、また、目録講習会の講師となる要員の養成が主眼であるので、そのためのプレゼンテーション能力を身につけるための講義と実習、講習会のカリキュラムと課題作成の演習、実際の目録講習会の演習補助としての指導実習などである。それ以外にも、各研修生の実務上抱える課題について発表して意見交換をしたり、週及入力や中国書入力の事例報告、目録作成現場であるTRCや明治大学図書館などの見学をしたりと盛りだくさんの内容であった。

NACISIS-CATや目録規則の最新動向についてはすぐに影響があるというものでなくても、いずれは現場にも何らかの反映があると考えられるものなので、注意していく必要があるであろう。また、自分が日頃抱えている問題について意見交換でき、他の機関からの参加者がそれぞれの職場で考えていることや問題点なども知ることができた。加えて、見学先で実際の業務の現場の状況を見、意見を聞くことができたのは大きな収穫であった。そのうち、明治大学図書館では、新しくできた図書館の施設を見学した。平成13年3月に開館したばかりで、区分けされた閲覧室(私語は言うに及ばず、パソコン、電卓等音を出すことは一切禁止の部屋があったり、話しながら

学習できるスペース、パソコン可のスペースなど)や、自動書庫(マイクロフィルム用に使用しているとのこと)などが目を引いた。また、目録の品質管理の事例報告があり、研修以前から気になっていた明治大学作成(または修正)のNC書誌の品質が、数年前とここ最近とを比べると大きくレベルアップしている理由がわかった。それは、かなりきちんとした目録作成・修正基準を担当課内で定めて運用し、外注している担当者にも適用して、チェック体制を整えていることにあるということである。実際にその作業をしている方の意見も聞くことができ、いい刺激となった。

また、演習は、目録講習会プログラムの作成と、講習会用の実習課題作成が課題として出され、3班に分かれてそれぞれ別のプログラムを期間内に仕上げ発表するというかなり時間的に厳しいものであった。プログラム作成に時間をとられ、実習課題作成の方の時間が足りなくなってしまうなど、時間配分にも苦労した。しかし、演習の最後に各班が発表した講習会プログラムは、実現するには難しい点もあるという指摘を受けたものの、それぞれ工夫されていて、開催されるのなら受けてみたいと思えるものに仕上がっていたのではないかと思う。これらの演習成果は国立情報学研究所のホームページ

(<http://www.nii.ac.jp/hrd/HTML/Db/>)に公開されているので、興味のある方はご覧いただきたい。

最後に、2週間という長期にわたる研修に快く送り出してくれ、留守中の業務をバックアップしてくれた係のメンバーに感謝して、今回の研修の報告とする。

(情報管理係)

“ΑΗΘΕΙΑ”

図書館の入り口の壁に掲げられている銘板のギリシャ文字“ΑΗΘΕΙΑ”(アレーティア)は、「真理」を意味します。

表紙デザイン

この表紙のデザインは、野澤隆秀氏(本学卒業生・前建設工学系助手)によるものです。

第14回国立大学図書館協議会 シンポジウムに参加して

中野洋子

平成13年11月28日、29日の2日間、京都大学附属図書館において上記シンポジウムの西地区の部が開催され、出席させていただきました。出席者は、富山大学から鹿児島大学までの国立大学及び機関の47名でした。メインテーマを「電子ジャーナルとコンソーシアムの形成」としたこのシンポジウムは、千葉大学土屋附属図書館長の「大学改革を支える電子図書館の姿」－「コンソーシアム」の新しい概念一という題目の基調講演で幕があげられました。

最近では、電子ジャーナルは、図書館関係の研究会やシンポジウムなどの開催時には、まず、テーマとしてとり上げられ、注目を浴びている項目となっています。

土屋館長は、大学図書館は、大学改革と社会の全般的情報化という二つの圧力のもとで変革を迫られている。この圧力は、大学図書館を押し潰してしまうもの、少なくとも抜本的に作り変えるものであるとの見解を示されました。私も図書館人の一人として漠然とは感じていた危機的な状況を、目の前に突きつけられたような気がしました。

また、図書館の役割は、電子化された知識社会に存在する学習コンテンツをアクセス可能な状態に維持し、全世界的に研究情報の電子化が進むなかで、キャンパスにいることによって、最も効率的かつ効果的に研究情報を利用かつ発信できる環境を提供すること、電子ジャーナルの導入はこの第一歩にすぎない、という内容のお話をされました。

私は今から13年前に司書の勉強をしていたのですが、そのときの講義の中で先生が、プロの司書は、研究者の専門とする研究分野を熟知し、その関係の情報をいち早くキャッチし、研究者にその情報を即座に流すものだと話されたのを聞き、大変驚くとともに、私もこのような司書になりたいとの思いを強くしたのでした。それまでは、図書館での仕事は、目録作成や本の貸借等くらいにしか思っていなかったもので、その先生の言葉はまさに衝撃的でした。しかし、それでも情報化がこのような爆発的に発展するとは予想もしませんでした。

土屋館長は、この情報化の賜物である電子ジャーナルの導入は、調査、交渉、契約、統計という一連の行為がつきもので、この過程で、1館のみでの対応に限界が出てきて、いわゆるコンソーシアムの形成が必要になる、といわれました。

次に、「電子ジャーナルとコンソーシアムについて」という題目で、北海道大学坂上附属図書館事務部長の講演がありました。

電子ジャーナルの導入から利用までに関しては、導入方針の策定、財源の確保が必要であり、会計制度上の問題にも対応しながら、単年度か多年度かというような契約上の諸問題を検討する事等のお話がありました。コンソーシアムについては、海外での例や日本での取り組み、国立大学図書館協議会が組織した電子ジャーナル・タスクフォースの活動にも触れられました。また、最近の国際的な動向として、国際図書館コンソーシアム連合（ICOLC）の活動が紹介されました。電子ジャーナルの選択と購入に関するICOLC声明等注目すべきとの説明もありました。豊富なご経験と知識により、時間内に収まりきれないほどの内容でした。

2日目は、「電子ジャーナルの導入と利用者サービスについて」と「コンソーシアム形成の実践について」という2つのサブテーマで、それぞれ各大学の担当者からの事例報告がありました。

どの報告にも、電子ジャーナルの登場と爆発的な発展に、少々戸惑いはあるものの、積極的にコンソーシアムの形成やユーザー教育に取り組む姿勢が感じられました。

電子ジャーナルの収集の範囲や優先順位、契約期間、財政的な問題等、検討すべき問題や解決が困難なこと等様々ありますが、本学も積極的にこの問題に関わっていかねばならないと感じています。

これまで、図書館といえば、静かで悠長の時の流れを感じる雰囲気、多くの本に囲まれながら読書をしたり、自習をしたり、新聞やCDなどを視聴するというイメージがありました。現代は、国際化と並んで情報化という言葉がキーワードとなっており、各方面で情報化が進展しておりますが、図書館も例外ではなく、情報化、電子化の進展の度合いは、目を見張るものがあります。図書館の発生は、圖書の出現とはほぼ同じ時期かその直後と考えられています。その後社会の要請を受けて、体質の改善をしながら発達してきたとは思いますが、現代ほど大きな変革を迫られたことはないのではないのでしょうか。

情報化や電子化を進めていく中で、忘れてならないのは、利用者です。利用者があり図書館が存在するので、自分の研究室にいながら、最新の電子

ジャーナルを読むのもよいが、書架の間から読みたい書物を手にとり、本に囲まれ、時を忘れて読書に耽るという図書館の利用法もなくなるといけないといわれる方もみえることと思います。

利用者から求められる従来のサービスも充実させ

ながら、大学改革を支える電子図書館として発展するために、図書館職員として資質を磨かなければとつくづく感じたシンポジウムでした。

(図書課学術情報係長)

Information

新たに契約した電子ジャーナルデータベースについて (学術情報係)

利用にあたってはID、パスワードは不要です。キャンパス内のネットワーク接続されたパソコンからご利用ください。

利用者が独自のID登録をすることで、関心のある雑誌の目次などをメールで受信できるAlert機能が、それぞれのデータベースに設けられております。是非、調査研究にお役立てください。

1. Elsevierのサイエンスダイレクト 約800誌 <http://www.sciencedirect.com/>

Elsevier社の電子ジャーナル全国コンソーシアムに参加。概ね1998年以降分が全文閲覧可能です。

2. SpringerのLINK 396誌 <http://link.springer.de/ol/index.htm>

Springer-LINKコンソーシアムに参加。2002年のLINKに含まれる電子ジャーナル全てにアクセスできます。バックファイルを含みますが、タイトル毎に、全文収録年が異なります。

3. Academic PressのIDEAL 約180誌 <http://www.idealibrary.com/>

国立大学等で構成される「日本イデアル・オープン・コンソーシアム Japan IDEAL Open Consortium / National University」に参加。2000年から2002年分が全文閲覧可能です。

広辞苑のネットワーク利用について (学術情報係)

広辞苑(第五版)を、「ことといクライアント」をインストールした学内端末から、あるいはWWWブラウザから<http://digital.lib.tut.ac.jp/koto.html>にアクセスすることで利用できます。(学内のみ)

利用の詳細については、図書館ホームページ「文献情報検索」をご覧ください。

<http://www.lib.tut.ac.jp/bunken.html>

図書館システムの更新 (学術情報係)

2月上旬に、図書館システムを更新しました。前機種からの利用者側の変更点として、蔵書検索用パソコンがWindows版になったこと、検索結果を出力するプリンターを1階のみに限定したことなどが挙げられます。すべての利用者が、お互いに気持ちよく利用できるよう、ご協力をお願いいたします。

OPAC検索と目録情報の見方

美野部 亜紀

本学では平成14年2月に図書館業務システムの更新を行い、館内蔵書検索（OPAC）が、Windows画面でできるようになりました。

ところで、利用者の皆さんは、資料を探す時に、OPACを使いこなしているでしょうか？

学内で所蔵する資料は、OPAC（おーぱっく）で検索することができます。OPACはonline public access catalogの頭文字をとったもので、コンピュータを通じてオンラインで利用できる蔵書目録です。館内に専用端末が各階に2台ずつ設置されていますが、インターネット上で公開されているので、パソコンがあれば、学内・学外いずれからもアクセスすることができます。

では実際に検索してみましょう。多くの場合はタイトルまたは著者から探します。

①タイトルから探す

検索にはフルタイトル検索とキーワード検索があります。ある分野の図書を検索したい・・・という場合はもちろんキーワードで探すこととなります。フルタイトル検索については、特定の資料を探していてフルタイトルを知っている場合でも、目録の知識が必要だったり、システムが検索の「ゆれ」に対応できず、うまくヒットしない場合が多いので、要注意です。キーワード検索に切り替えたり、考えられるあらゆる検索を試す必要があります。

②著者から探す

基本的にはタイトルからの検索方法と同じです。こちらもヒットしない場合、いろいろな検索を試みてください。

さて、検索結果が表示されたら、タイトルをクリックして詳細なデータを見ましょう。目録というのは、「書誌データ」と「所蔵データ」の二つから成り立っています。書誌データはタイトル・著者（責任表示といいます）・出版者・出版年・大きさ・ページ数などからなる、図書についての情報です。

書誌データの次は、「所蔵データ」を見てみましょう。「所蔵データ」で所在（どこにあるか）・請求記号（図書の背ラベルの表示）等を確認したら、実際に書架を探します。背ラベルについている数字は、図書の主題にしたがって付けられており、図書はこの番号順に並べられています。ですから、目的の図書を探しにゆくと、そこには同じようなテーマについて書かれた他の図書が並んでいます。

雑誌の場合は、所蔵年と所蔵巻号が表示されます。ここに記載されている巻号については図書館あるいは研究室で所蔵していますが、記載されていない巻号は見ることができません。また、巻号のあとの十のマークは、最新号を継続して購読しているという意味の印です。

検索した資料が、図書館にあれば問題ありません。しかし、下記のように、所蔵していなかったり、あるいは所蔵していたとしてもすぐに利用できる状態ではないことがあります。このような場合は、必要であればいろいろな手段で目的の資料を見ることが出来ますので、あきらめないでください。

①資料が貸出中／所在が研究室になっている

貸出中の資料には、OPACから予約をかけることができます。学籍番号と24時間開館のパスワードでログインします。予約の解除も簡単です。また、研究室の図書を閲覧したい時は、カウンターの職員に申し出てください。

②技科大では所蔵していない

本学では所蔵していない資料でも、図書館間相互貸借といって、図書館を通じて他の機関から借りたり、複写を依頼することができますので、こちらも職員にご相談ください。また、購入希望図書の制度もあります。OPAC横に備え付けの用紙にタイトルなど必要事項を記入してボックスに入れてください。絶版などの事情により購入できない場合がありますが、購入後優先的に利用できます。

現在では、国立国会図書館をはじめ、大抵の国立・公立の図書館が自館のOPACを、インターネット上で公開しています。また、多数の大学図書館が参加する国立情報学研究所・NACSIS-CATの「NACSIS Web cat」では、検索した資料の所蔵館が分るため、大変便利です。

カウンターで仕事をしていると、雑誌の所蔵状況について聞かれる事が多いのですが、これは言い換えると、利用者の方は、図書はともかく、雑誌の検索にはまだ不慣れだということなのかもしれません。蔵書検索は昔に比して、より便利で簡単になっているとはいえ、利用者教育の必要性を常に感じています。現在蔵書検索について、まとまった形でのガイ

ダンスは行っていませんが、何か分からないことがありましたら、いつでも気軽に職員にたずねてください。

最後にプライバシーの問題について。先ほど述べたように、現在の館内OPACはインターネットブ

ラウザを利用した、Web形式です。このため、検索が終わった後そのままにしておくと、検索履歴が残ってしまいます。利用者の皆さんには、面倒でも検索が終わったらトップメニューをクリックして初期画面に戻るようお願いします。

(情報サービス係)

文献情報ガイダンスのお知らせ

附属図書館では、これから論文を書く人のため、今日の学術情報の電子化やインターネットの進展等がめざましい環境の中で、効率よく必要な情報を獲得する方法について、下記のとおりガイダンスを実施いたします。

対象は、実際に論文を作成予定の方々（学部4年生、大学院生、教官）です。

参加ご希望の方は、レファレンスデスクに用意してあります所定の申込書にご記入のうえ、学術情報係宛にお申し込みください。

なお、テーマ別に実施日時が異なりますので、詳細はレファレンスデスク又は学術情報係（内線 6564）でお尋ねください。

申し込み締切日は、4月19日（金）です。

記

実施日時 平成14年4月22日（月）～5月31日（金） 土、日、祝日は除く

実施内容 1) 文献の調べ方

- (テーマ)
- ・ Swet Scan の検索
 - ・ Enjoy JOIS の検索
 - ・ CA on CD(Cheical Abstracts) の検索
 - ・ 雑誌記事索引ファイルの検索

2) 電子ジャーナルの利用

Elsevier サイエンスダイレクト
Academic Press IDEAL
Springer LINK, 等

3) 蔵書検索の仕方 (OPAC)

4) 文献複写申込書の記入方法



- | | |
|--------------------|---|
| 13.10.3
～ 5 | 平成 13 年度目録システム地域講習会 (図書コース) (名古屋大学)
受講者 情報サービス係 美野部亜紀 |
| 13.10.17
～ 19 | NAIST 電子図書館学講座 (会場: 奈良先端科学技術大学院大学)
参加者 学術情報係 妹尾ひとみ |
| 13.10.23
～ 26 | 平成 13 年度全国図書館大会 (会場: 長良川国際会議場ほか)
参加者 図書課長, 情報サービス係長 梅村智文
学術情報係長 中野洋子, 情報管理係 黒柳裕子 |
| 13.10.29
～ 11.9 | 平成 13 年度総合目録データベース実務研修 (会場: 国立情報学研究所)
受講者 情報管理係 黒柳裕子 |
| 13.11.28
～ 29 | 国立大学図書館協議会シンポジウム (会場: 京都大学)
参加者 学術情報係長 中野洋子 |
| 13.12.13 | 東海地区国立大学図書館協議会事務連絡会 (会場: 名古屋大学)
出席者 教務部長, 図書課長 |
| 13.12.20 | 東海地区大学図書館協議会研修会 (第 1 回) (会場: 大同工業大学)
参加者 情報管理係 黒柳裕子 |
| 14. 1.24 | 東海地区大学図書館協議会研修会 (第 2 回) (会場: 名古屋大学)
参加者 情報サービス係 美野部亜紀 |
| 14. 2. 7
～ 8 | 第 4 回高专・豊橋技術科学大学図書館業務検討会 (会場: 本学)
参加校 呉工業高等専門学校, 徳山工業高等専門学校
大島商船高等専門学校, 詫間電波工業高等専門学校
新居浜工業高等専門学校 |

豊橋技術科学大学附属図書館報「AATH@EIA」第 23 号 平成 14 年 4 月 1 日

■編集・発行 豊橋技術科学大学教務部図書館課

■〒 441-8580 愛知県豊橋市天伯町雲雀ヶ丘 1-1 TEL. 0532-44-6562

FAX. 0532-44-6566